編集後記

「国文学雑誌」一〇四号をお届けします。

今回は、専任教員四名の論文と、二〇二〇年三月に卒業した学生の卒業研究を掲載することができました。

パンデミックの影響を被らない分野はどこにもないと思いますが、大学にもその影響は押し寄せました。昨年来、慣れないオンライン授業で、教員も学生も疲弊しました。そして、どうにかして対面授業の再開を望み、模索する事態は続いています。人文学関係の学会は、軒並み延期ないし、オンライン開催となり、「リアル」で行われていたときの、休憩時間での会話や懇親会は期待すべくもありません。調査旅行もそう自由には行えません。インターネット上の有益な情報やデータベースにアクセスし、役立てるのは、こういった状況であれば、活発に行うべきだとは思います。ただし、それはあくまで、使用する側の自立性を確保した上でです。ガヤトリ・C・スピヴァクは、二〇一二年に「京都賞」を受賞した際の来日公演で、教師や学生の「知的労働の権利」に言及します。下層カーストの人々から奪われてきたその権利はアメリカの学生たちに、別な作用で及んでいる、というのです。「（アメリカの学生たちは）インターネットによる検索エンジンの機能に頼り、卒業後の雇用と収入にしか焦点をおかない学習態度にどっぷり浸かっており、それは、彼らが知的労働の権利を奪われていることだ」と指摘しています。さらに「最新のテクノロジーは、毒にも薬にもなる、それが生産的に使われるとすれば、唯一、人文学の遅い速度で訓練された頭脳と心による」のだ、と明言します。（「いくつもの声」、二〇一四年二月、人文書院）

この、「遅い速度」で学生の知的活動を支え、研究を維持することの重要性は、いくら強調してもしすぎることはない、と思います。今回の「国文学雑誌」の執筆者は専門領域として、現代のようなテクノロジーのなかった時代の文化的産物を扱っています。それぞれの時代にどんな時間が流れていたのか、思いをめぐらせながらお読みいただければ幸いです。

種田和加子

二〇二一年六月二十五日　印刷
二〇二一年六月三十日　発行
藤女子大学　国文学雑誌（第104号）
定価　五〇〇円
振替　〇二七〇〇―四―一六八〇七番
編集人　揚妻祐樹
発行人
発行所　札幌市北区北十六条西二丁目
藤女子大学日本語・日本文学科研究室内
藤女子大学日本語・日本文学会
印刷所　札幌市中央区北六条西十五丁目
㈱491アヴァン札幌